

## 日本人英語使用者の特徴と英語能力

—JGSS-2002 と JGSS-2006 のデータから—

小磯 かをる

大阪商業大学総合経営学部

The Characteristics of English Users and English Proficiency of Japanese People:  
From the Data of JGSS-2002 and JGSS-2006

Kaoru KOISO

Faculty of Business Administration

Osaka University of Commerce

Based on the data of JGSS-2002 and JGSS-2006, this study examines the characteristics of English users in Japan and the change of English proficiency of Japanese people. The results show the followings: from the data of JGSS-2002 those who have higher education, higher household income, higher professionalism, and one other factor, unmarried, have higher likelihood of using English, while from the data of JGSS-2006, younger generation with higher education have higher likelihood of using English. The comparison of both data indicates that English proficiency of Japanese people has improved partly because of more exposure to English in their daily lives or on business, while the number of people who have good command of English has not increased. We also find there is a sign that English proficiency is affected by economic conditions in their childhood.

Key Words: JGSS, English users, English proficiency

本稿では、JGSS-2002 と JGSS-2006 のデータを基に、英語を使用する者の特徴と英語使用の用途を明らかにするとともに日本人の英語能力（英会話力と英語読解力）の変化を分析する。分析の結果以下のことが判明した。JGSS-2002 では男女とも管理職や専門職で学歴が高く、世帯収入が多く、未婚である者が英語使用の見込みが高く、JGSS-2006 では男女とも年代が若く、学歴の高い者の英語使用の見込みが高い。JGSS-2006 では、JGSS-2002 よりも英語能力が高くなっているが、仕事や趣味などで英語を使う機会が増えているためだと考えられる。全体的な英語能力は高くなっているが、英語を十分使いこなせるレベルの者は増加していない。また子どものころの経済状態で英語能力の差がついていく傾向が見られる。

キーワード：JGSS，英語使用者，英語能力

## 1. はじめに

コミュニケーションツールとしての英語の役割はますます広がり、母国語として英語を使う者は 3 億 5 千万人、第 2 言語として日常的に英語を使う者は 3 億から 5 億人、外国語として英語を使う者は 5 億から 10 億人に上り、国連各種会議の 95%が英語で行われ、インターネット情報の 40%、TV 番組の 75%が英語で発信されていると言われている<sup>(1)</sup>。ビジネスの世界でも、英語が英語母国圏との取引だけでなく、非英語母国圏とのビジネスにリングフランカとして日常的に使われている。このように英語の必要性がますます認識されるなか TOEIC の受験者は毎年増加しており、1979 年には 3 千人だった受験者が 2007 年には 163 万人を超えている<sup>(2)</sup>。一方、日本人の英語能力は期待されている程は向上していない。2007 年度の TOEFL の平均スコアはペーパーベースのテストではアジア 24 カ国の中で 22 番目であり、インターネットベースのテストでも日本はアフガニスタンについて下から 2 番目であった<sup>(3)</sup>。日本人の英語能力の向上を図って文部科学省は小学校の英語教育の導入を進めており、平成 14 年度には、「統合的な学習の時間」の活動の一つとして小学校で外国語会話活動が正式に始まり、平成 19 年度には全国の 97.1%の小学校で英語活動が実施されている。また、平成 20 年 3 月 28 日には小学校学習指導要領の改訂が告示され、新学習指導要領では小学校 5・6 年で週 1 コマ「外国語活動」を実施することとされた。同時に「使える英語」能力の向上を目指し、平成 20 年 12 月に出された高等学校指導要領改訂案では高校での英語の授業を英語で行うことも提言されている。このような背景の中、実際日本人がどのような用途で、どれ位の者が英語を使用しているのかという全国的な調査は行われていない。同様に、日本人の英語能力を測る調査としては、TOEFL や TOEIC の結果が公表されているのみで、日本人全般の英語能力を測るデータは提供されていない。JGSS-2002 では、英語がどのような用途で、どれほど使われているかを尋ねている。また、JGSS-2006 でも同様の質問項目がなされた。英会話力と英語読解力に関する質問も JGSS-2002 と JGSS-2006 でなされている。本稿では、JGSS-2002 と JGSS-2006 のデータを使って、①英語がどのような用途で使用されたか、どのような者が英語を使用しているのか、「仕事」で英語を使用するものはどのような者か、という英語の使用に係わる分析と、②英語能力（英会話力・英語読解力）の変化とその規定要因を探る。

## 2. 英語使用者

### 2.1 英語使用者の割合

英語使用に関する質問項目は JGSS-2002 と JGSS-2006 で違いがある。JGSS-2002 では「あなたは、日常生活や仕事で英語を使いますか。」と質問しているのに対して、JGSS-2006 では「あなたは過去 1 年間に、以下のことで英語を読んだり、聴いたり、話したりしたことが少しでもありますか。」と尋ねている。

JGSS-2002 では有効回答者 2953 人のうち 395 人 (13.4%) が英語を日常生活や仕事で使用したと回答し、JGSS-2006 では有効回答者 2130 人のうち 944 人 (44.0%) が過去 1 年間で英語を少しでも使用したと回答している。

図 1 は英語を使用する者の割合を、男女別、年代別に JGSS-2002 と JGSS-2006 年を比べたグラフである。男性の場合、JGSS-2002 では 30 歳代の使用が一番多く 20.4%、ついで 20 歳代 18.9%、40 歳代 18.7%と続く、一方 JGSS-2006 では、20 歳代の使用が一番多く、74.5%、ついで 40 歳代 65.8%、30 歳代 65.6%と続く。女性の場合、JGSS-2002、JGSS=2006 とも 20 歳代が一番高く (JGSS-2002:23.3%、JGSS-2006:72.1%) 年代が高くなるほど減少する。

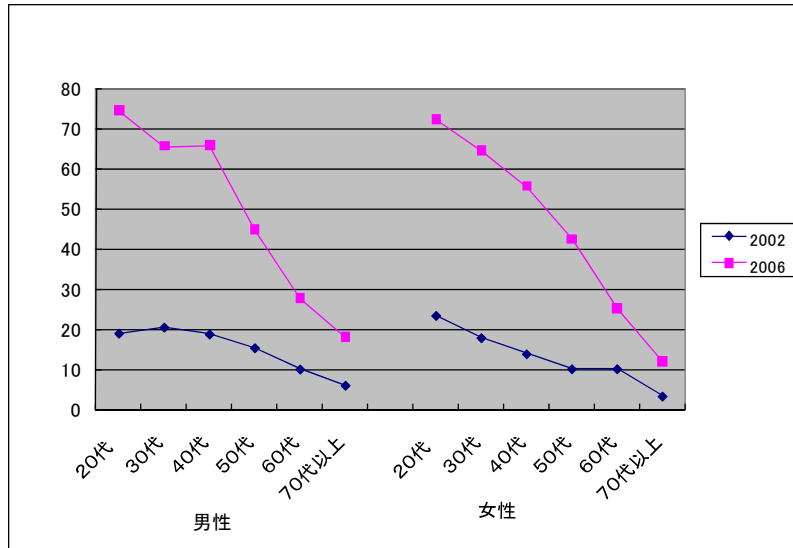


図1 現在の英語使用（年代別）JGSS-2002 と JGSS-2006 のグラフ

図2はJGSS-2002とJGSS-2006のZ-scoreの平均値を男女別に示したものである。図からも明らかなようにJGSS-2006では使用する者の年代差が大きい。JGSS-2006では20歳代の使用が際立って高い。女性の場合、JGSS-2002では50歳代と60歳代の差はほとんど見られないが、JGSS-2006では年齢層が高くなるにつれて使用する者が減っている。

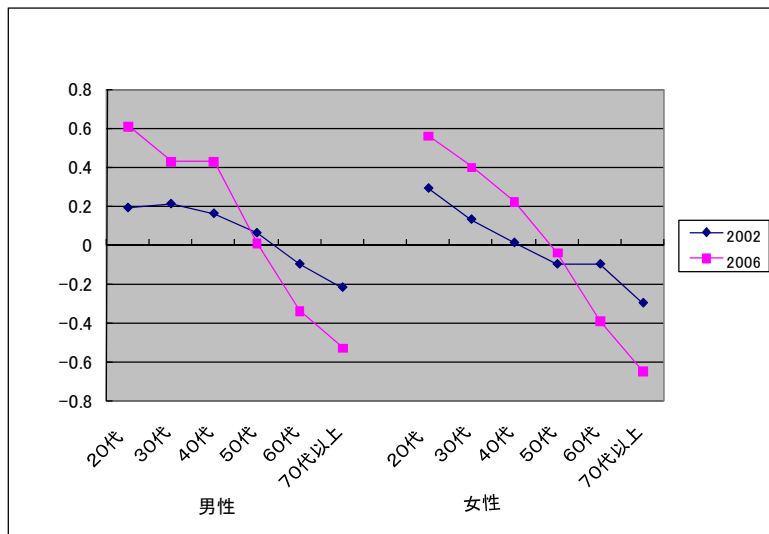


図2 男女別・年代別の「英語使用」のZ-scoreの平均値

図3は英語を使用する者を職種別に比べたグラフである。男性の場合、JGSS-2002、JGSS-2006とも上層ホワイト（専門職・課長以上の管理職）が他の職種よりも英語を使用している割合が高い。JGSS-2002では、上層ホワイトの35%ほどが、またJGSS-2006では70%以上が英語を使用していると回答している。しかしながら、図4のZ-scoreの平均値を見ても明らかなように、JGSS-2006では、下層ホワイト（係長以下の一般事務職）やブルーカラーの英語使用と上層ホワイトの英語使用の差がそれほど大きくない。女性の場合には、2002年には上層ホワイトの英語使用が群を抜いて高かったが、2006年には下層ホワイトのほうが若干ではあるが上層ホワイトよりも高くなっている（上層ホワイト60%、下層ホワイト60.3%）<sup>(4)</sup>。

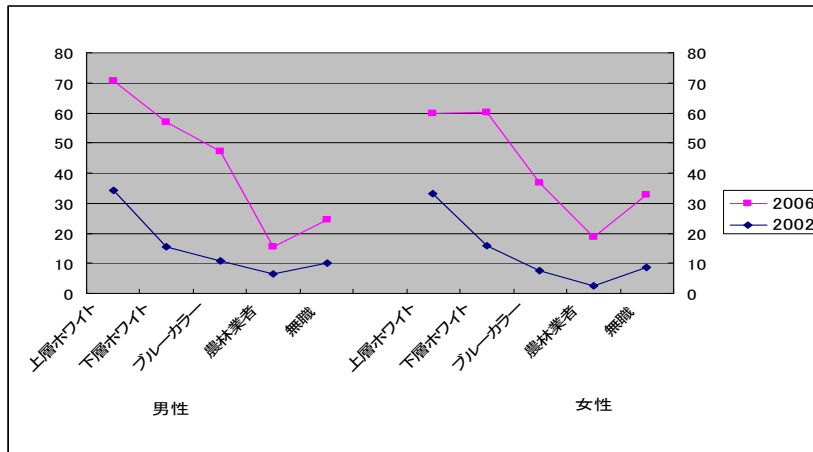


図3 現在の使用職種別

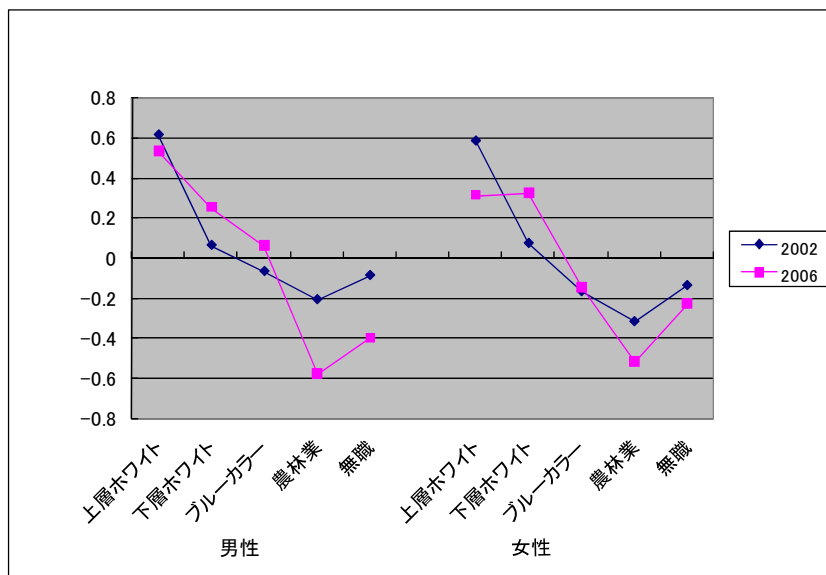


図4 男女別・職種別の Z-score の平均値

## 2.2 英語使用の規定要因

現在英語を使用しているグループの特徴を調べるために、英語を使用しているグループを「1」に使用していないグループを「0」として JGSS-2002 と JGSS-2006 のそれぞれのデータを基にロジスティック解析を行った。個人属性を表す独立変数として、年代、職種、都市サイズ、本人学歴、世帯収入（主観的収入）、結婚の有無を投入した<sup>(5)</sup>。70 歳代以上の回答数が少なかったため、これらの回答者は 60 歳代以上に組み入れた。

表 1 英語使用の有無のロジスティック解析 (オッズ比)

2002 英語使用			2006 英語使用		
独立変数	男性	女性	独立変数	男性	女性
30代	1.242	1.177	30代	0.57 △	0.964
40代	1.285	0.982	40代	0.586	0.794
50代	1.135	1.192	50代	0.262 ***	0.560 △
60以上	0.689	1.259	60以上	0.190 ***	0.290 ***
下層ホワイト	0.416 ***	0.554 *	下層ホワイト	0.600 *	1.308
ブルーカラー	0.431 **	0.459 *	ブルーカラー	0.550 *	0.913
農林漁業	0.296 △	0.164 △	農林漁業	0.155 ***	0.631
無職	0.617	0.455 **	無職	0.402 **	0.856
13大都市	1.205	1.241	13大都市	1.199	2.601 ***
その他の市	1.278	0.988	その他の市	1.065	1.987 **
中等教育	2.014 *	2.235 *	中等教育	2.384 ***	2.356 **
高等教育	3.251 ***	6.303 ***	高等教育	4.231 ***	4.674 ***
世帯収入(共変量)	1.545 ***	1.426 **	世帯収入(共変量)	1.167 △	1.318 **
既婚ダミー	0.566 *	0.431 **	既婚ダミー	1.016	0.416 **
カイ2乗	122.33	161.291	カイ2乗	261.15	297.223
Cox&Snell R <sup>2</sup>	0.088	0.100	Cox&Snell R <sup>2</sup>	0.228	0.241
Nagelkerk R <sup>2</sup>	0.155	0.092	Nagelkerk R <sup>2</sup>	0.305	0.324
N	1333	1527	N	1008	1078

\*\*\* p<.001 \*\* p<.01 \* p<.05 △p<.10

表1はJGSS-2002とJGSS-2006の男女別の結果である。JGSS-2002では、男女ともに影響力があるのは、学歴、世帯収入、職種、結婚の有無である。学歴が高く、世帯収入が高い者が英語使用の見込みは高くなる。上層ホワイト（専門職・課長以上の管理職）に比べて下層ホワイト（係長以下の一般事務職）の使用の見込みが有意に低い。男女とも義務教育の者に比べて、中等教育・高等教育を受けた者が英語使用する見込みが高い。また、未婚者に比べて既婚者の見込みは低くなる。一方、年代の影響、都市サイズの影響はみられない。

JGSS-2006では、年代の影響が見られる。男女とも20歳代に比べて、50歳より上の者の使用の見込みが有意に低い。これは図1、図2からも明らかのように20歳代の英語の使用が高いからである。職種の影響をしてみる。JGSS-2006では、女性の場合職種の影響は見られない。女性の場合、都市サイズが大きくなるほど英語使用の見込みが高くなっている。これはJGSS-2006では「映画鑑賞・音楽鑑賞・読書」で使用する者が女性の場合、都市部に多いためである。学歴の影響はここでも見られ、男女とも義務教育の者に比べて、中等教育・高等教育を受けた者が英語使用する見込みが多い。世帯収入と結婚の影響は男性の場合5%水準では見られない。

JGSS-2002とJGSS-2006の英語使用者の特徴をまとめると以下ようになる。JGSS-2002では男女とも管理職や専門職で学歴が高く、世帯収入が多く、未婚であるものが英語使用の見込みが高い。一方、JGSS-2006では男女とも年代が若く、学歴の高い者の英語使用の見込みが高い。またそれらに加えて男性の場合管理職や専門職に就いている者、女性の場合都市部に住み、未婚の者で世帯収入が高い者が英語使用の見込みが高い。

### 2.3 英語使用の用途

英語使用の用途に関する質問項目は JGSS-2002 と JGSS-2006 では少し異なっている。仕事に関しては JGSS-2002 では「仕事で時々使う」「仕事でよく使う」と別々に尋ねており、今回の分析では両者を統合して「仕事で使う」という変数を作成し、使用した。JGSS-2006 では「仕事」に統一されている。また回答度数が多かった「趣味・旅行」についても JGSS-2002 では「趣味・娯楽・海外旅行などで使う」と趣味と旅行を一つの質問項目で尋ねているのに対して、JGSS-2006 では「映画鑑賞・音楽鑑賞・読書」と「海外旅行」の2つに分けて尋ねている。また JGSS-2006 では「インターネット」という質問項目を新たに挿入している。

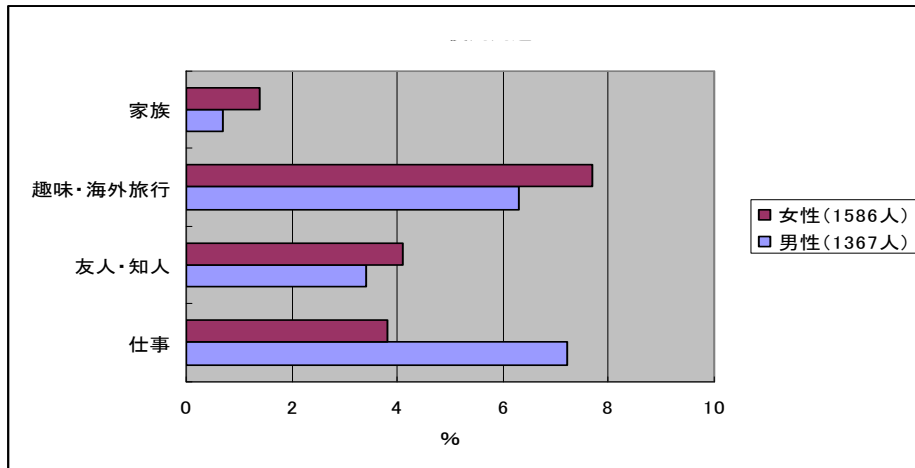


図5 JGSS-2002の男女別使用用途

図5は JGSS-2002 の使用用途を男女別に示したものである(ただし「その他」を除く)。男性は「仕事で使う」者が一番多く(7.2%)、女性は「趣味・娯楽・海外旅行などで使う」者が一番多い(7.7%)。一方、「家族とのコミュニケーションに使う」者は男女とも2%にも満たない(男性:0.7%、女性:1.4%)。男女差に関しては「外国人の友人や知人との付き合いで使う」を除いては、全ての項目で有意差があった。

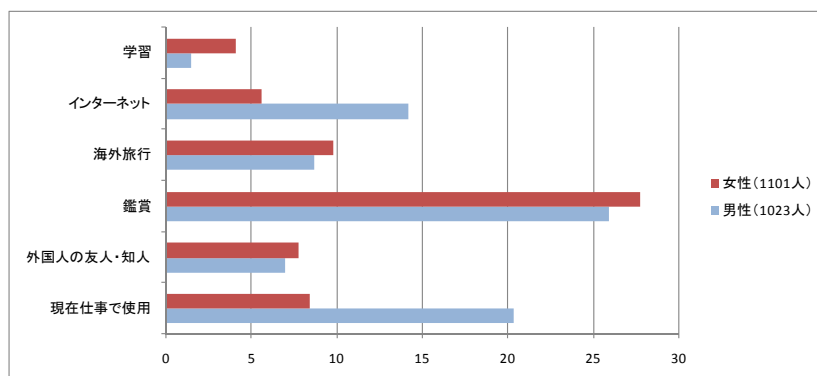


図6 JGSS-2006の男女別使用用途

一方、図6の JGSS-2006 のデータを見ると、男女とも選択率が一番高かったのは「映画鑑賞・音楽鑑賞・読書」であり、男性の25.7%、女性の27.2%が使用すると回答している。また、仕事で使用している者は男性20.3%、女性8.4%であり、男女間で有意差があった項目は「仕事」(男性>女性  $p < .001$ )、「インターネット」(男性>女性  $p < .001$ )、「学習」(女性>男性  $p < .001$ )であった。

## 2.4 仕事での使用

### 2.4.1 仕事で使用する者の割合<sup>(6)</sup>

JGSS-2002 では男性就労者の 9%、女性就労者の 7.1%が仕事で使用したと回答しており、JGSS-2006 では、男性就労者の 25.2%、女性就業者の 15.1%が仕事で使用すると回答している。

図7は、「仕事での英語使用」を年代別に男女ごとにグラフにしたものである。男性の場合 JGSS-2002、JGSS-2006 とも 40 歳代の使用が一番多い。JGSS-2002 では 50 歳代の使用が 30 歳代よりも多かったが JGSS-2006 では 30 歳代の使用の割合が 50 歳代より高い。図 8 の Z-score の平均値を見ても明らかなように、JGSS-2006 では、30 歳代と 40 歳代の使用がかなり多い。

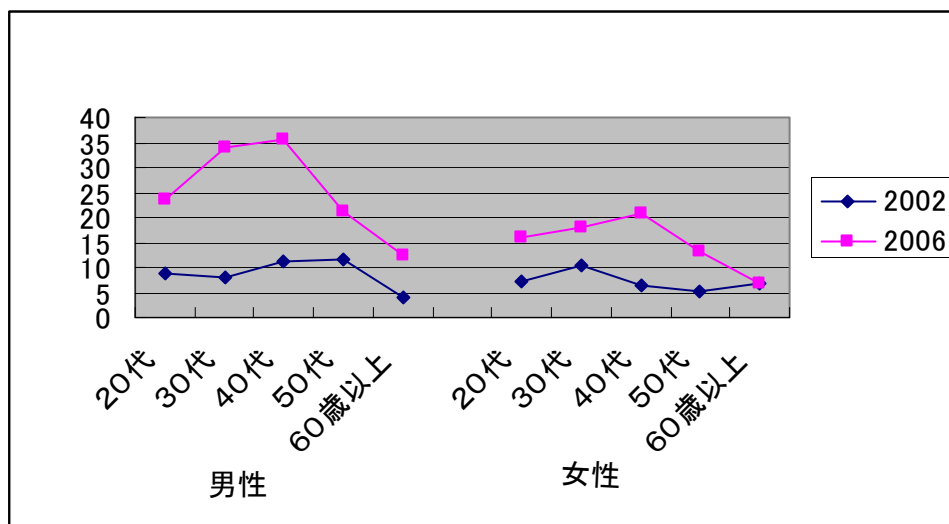


図7 仕事で使用：年代別

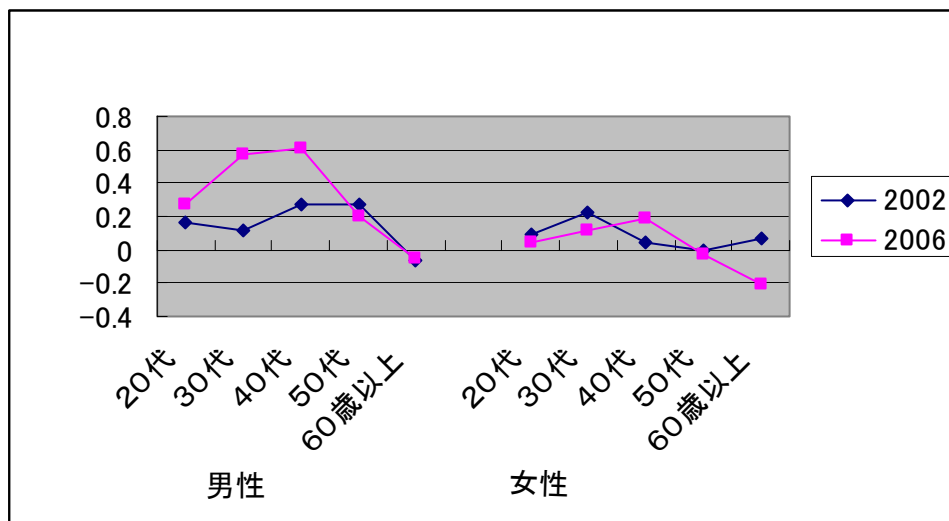


図8 仕事で使用する年代別・男女別の Z-score の平均値

一方、女性の場合、JGSS-2002 では 30 歳代が一番多かったが、JGSS-2006 では、20 歳代と 30 歳代にはあまり差がなく 40 歳代が一番多い。

図 9 は、「仕事での英語使用」の割合を職種別に、図 10 は Z-score の平均値をグラフにしたものである。男女とも上層ホワイト、下層ホワイト、ブルーカラーの順に使用率が低くなっているが、JGSS-2006 では JGSS-2002 に比べて下層ホワイトの使用が多くなっている。特に女性の場合 JGSS-2006 では上層ホワイトと下層ホワイトでは統計的に有意差はなかった。つまり男女とも JGSS-2006 では JGSS-2002 に比べて下層ホワイトが仕事で英語を使用することが多くなっているということである。

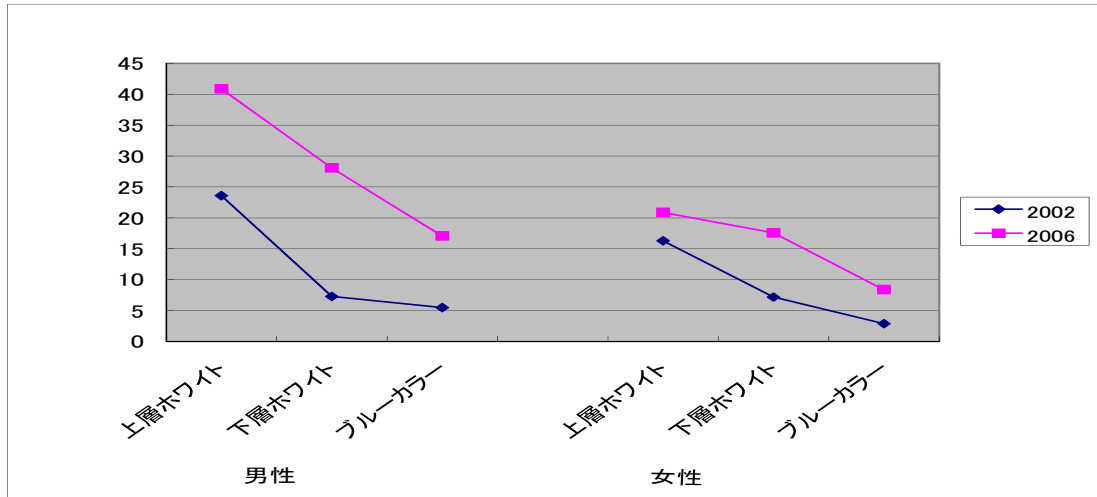


図9 仕事で使用職種別

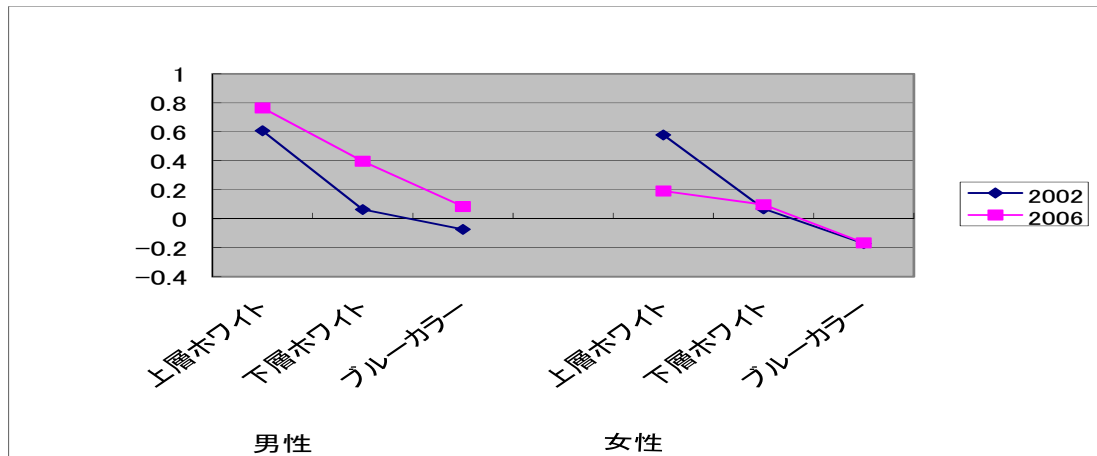


図10 仕事で使用職種別 Z-score 平均値

#### 2.4.2 「仕事で使用」のロジスティック解析

仕事で使用しているグループを「1」に、使用していないグループを「0」として、前項で使用した変数を説明変数にロジスティック解析を行った。表2はその結果である。回答者が少なかった「農林漁業従事者」は分析から除外した。

両データにおいて、男女とも、都市サイズ、学歴の影響は見られない。学歴の高い者の方が仕事で英語を使用する割合が高いが ( $p < .001$ )、学歴の高い者は、上層ホワイトになる者が多く、職種の影響に組み込まれているためだと考えられる。

職種の影響は JGSS-2002 では上層ホワイトに対して、下層ホワイト、ブルーカラーの使用見込みが男女ともに低い。JGSS-2006 では女性の場合、5%水準では有意な差がない。JGSS-2002 では英語は専門職や管理職など上層部が使用していたのに対し、JGSS-2006 では女性の場合未だ役職についていない一般事務職も仕事で英語を使用する機会が多くなったと考えられる。また男性の場合も上層ホワイトに対して下層ホワイト、ブルーカラーの使用見込みのオッズ比が高くなっており、職種間の差は JGSS-2002 ほど大きくない。

世帯収入は男性の場合 JGSS-2002、JGSS-2006 とも有意な予測変数であるのに対し、女性の場合には有意な影響を与えていない。今回分析に使用したのは世帯収入であり、本人収入ではないので<sup>(7)</sup>厳密に論じられないが、仕事で英語を使用するものが年収が高いという先行研究(鹿野, 2005)を男性の場合支持していると言えよう。



年代の影響は男性の場合、両データとも見られない。女性の場合、JGSS-2002年では20歳代に比較して、他の年代の使用が有意に高いが、JGSS-2006では差はみられない。JGSS-2002では男女とも未婚の者のほうが既婚の者より英語を仕事で使用する見込みが高かったが、JGSS-2006では影響が見られない。

仕事で英語を使用する者の特徴をまとめると以下ようになる。両データとも学歴の影響は見られない。JGSS-2002では男性の場合上層ホワイトで、世帯収入が高い者が、女性の場合上層ホワイトで年代が高く、未婚の者が仕事で英語を使用する見込みが高い。一方、JGSS-2006では、男性の場合、上層ホワイトで世帯収入が高い者が仕事で英語を使用する見込みが高いが、女性の場合年代の影響も職種の影響も見られない。

表2 仕事で使用の有無のロジスティック解析（オッズ比）

2002 仕事で使用			2006 仕事で使用		
独立変数	男性	女性	独立変数	男性	女性
30代	1.149	3.255 *	30代	1.352	1.199
40代	1.883	2.860 △	40代	1.356	1.714
50代	1.942	3.649 *	50代	0.598	1.145
60以上	0.880	5.046 *	60以上	0.495	0.765
下層ホワイト	0.311 ***	0.439 *	下層ホワイト	0.610 *	0.846
ブルーカラー	0.283 ***	0.254 **	ブルーカラー	0.406 **	0.489 △
13大都市	0.846	1.650	13大都市	1.406	1.08
その他の市	0.918	0.969	その他の市	1.030	0.909
中等教育	1.670	0.845	中等教育	1.499	3.474
高等教育	2.221	1.994	高等教育	1.874	2.827
世帯収入(共変量)	1.382 *	1.210	世帯収入(共変量)	1.317 **	1.193
既婚ダミー	0.488 *	0.276 **	既婚ダミー	1.450	0.865
カイ2乗	59.436	50.786	カイ2乗	69.579	20.47
Cox & Snell R <sup>2</sup>	0.062	0.067	Cox & Snell R <sup>2</sup>	0.092	0.038
Nagelkerk R <sup>2</sup>	0.131	0.16	Nagelkerk R <sup>2</sup>	0.135	0.066
N	944	751	N	721	530

\*\*\* p<.001 \*\* p<.01 \* p<.05 △p<.10

### 3. 英語能力

#### 3.1 英会話力と英語読解力

JGSS-2002とJGSS-2006では英会話力と英語読解力に関する質問がなされている。英会話力を問う質問「あなたは、英語でどのくらい会話ができますか」には「日常生活や仕事の英会話ができる」、「日常生活や仕事の英会話はなんとかできる程度」、「道をたずねたり、レストランで注文できる程度」、「あいさつができる程度」、「ほとんど話せない」の選択肢が、英語読解力を問う質問「あなたの英語の読解力は、どのくらいですか」には「英語の本や新聞が、スラスラ読める」、「英語の本や新聞を、なんとか読める」、「短い英語の文章なら読める」、「簡単な英単語ならわかる」、「ほとんど読めない」という選択肢が与えられている。

英会話力と英語読解力の平均値はJGSS-2002は会話4.41、読解4.17、であり、JGSS-2006は会話4.32、読解4.08 (P<.001 数値は低い方が能力が高い) であり、JGSS-2002に比べてJGSS-2006のほうが会話力・読解力とも高まっている。男女別の平均値をみると、JGSS-2002の英会話力は、男性4.37、女性4.45 (p<.01)、英語読解力は男性4.14、女性4.22 (p<.01) であり、JGSS-2006では、英会話力は男性

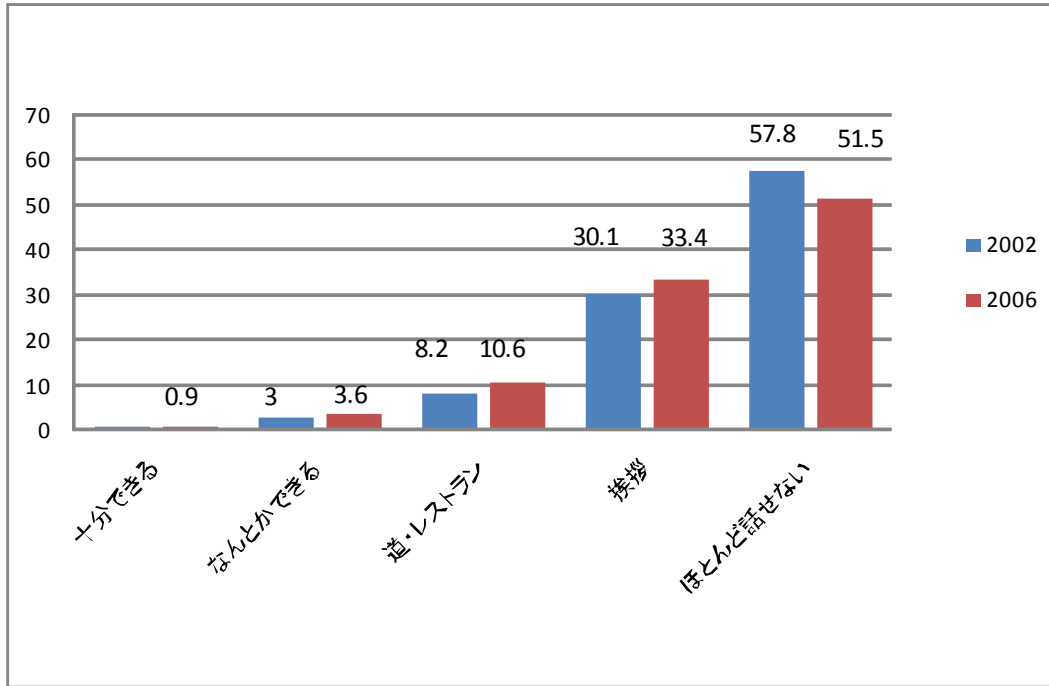


図 11 会話力のレベル

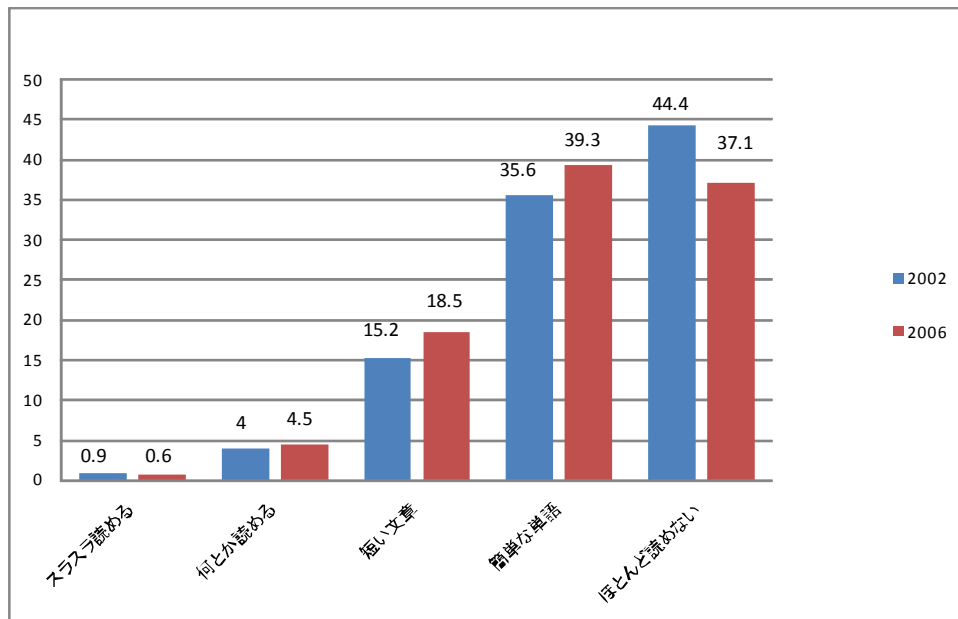


図 12 読解力のレベル

4.27、女性 4.36 ( $p<.05$ )、読解男性 4.04、女性 4.12 ( $p<.05$ ) であり、すべてにおいて男性の能力の方が高い。

図 11・図 12 は英会話力・英語読解力の JGSS-2002 と JGSS-2006 を比較したものである。会話・読解とも「ほとんど読めない」「ほとんど話せない」と回答した者の割合が減っており、「あいさつができる程度」「簡単な英単語ならわかる」者や「道をたずねたり、レストランで注文できる程度」「短い英語の文章なら読める」者は増えてはいる。しかし、実際に英語が使えると思われるレベルの者、つまり「日常生活や仕事の英会話が、充分できる」「日常生活や仕事の英会話は、なんとかできる程度」の者や「英語の本や新聞が、スラスラ読める」「英語の本や新聞を、なんとか読める」者はほとんど増えていない。

3.2 英語能力

表3 英会話力と英語読解力のクロス表(%)

	十分できる	なんとかできる	道・レストラン	挨拶	ほとんどできない
スラスラ読める	<b>63.4</b>	6.6	0.2	0.1	0.0
何とか読める	29.3	<b>59.0</b>	15.7	1.5	0.1
短い文章	2.4	29.5	<b>69.2</b>	23.8	3.1
簡単な単語	4.9	0.0	14.7	<b>64.8</b>	27.4
ほとんど読めない	0.0	0.0	0.2	9.9	<b>69.3</b>
人数	41	166	464	1591	2778

表3は英会話力と英語読解力のクロス表である。表からも会話力と読解力は強い相関関係があることがわかる ( $r=.763$ )。そこで、英語会話力と英語読解力を統合して「英語能力」という新しい変数を作成した(値は10~2で値が高いほうが能力が高い)。JGSS-2002の平均値は、3.41(男性:3.49>女性:3.33  $p<.01$ )、JGSS-2006は3.61(男性:3.70>女性:3.52  $p<.05$ )であり男女とも2006の方が高い。

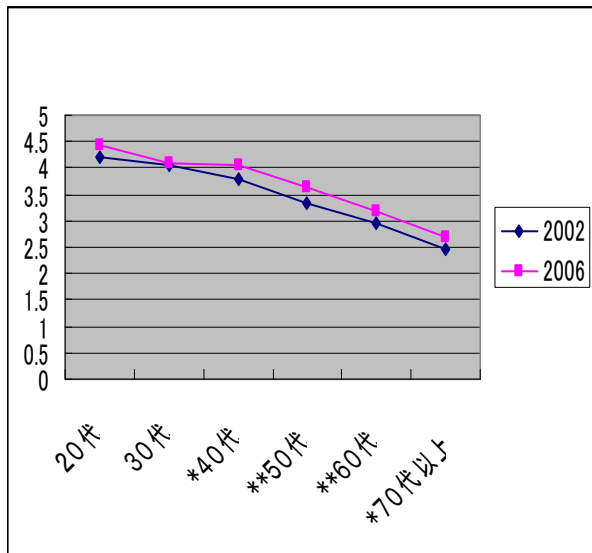


図13 年代別英語能力平均値

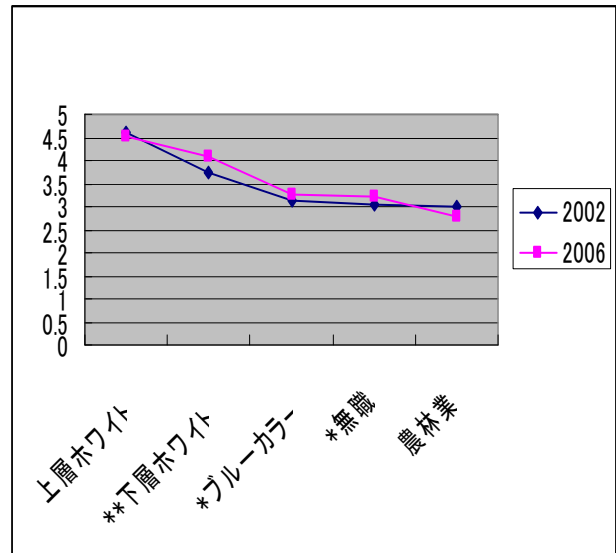


図14 職種別英語能力平均値

図13、14は「英語能力」の年代別、職種別平均値である。各年代においてJGSS-2006の方が英語能力が高く、両年度とも年代の若い者が英語能力は高い。JGSS-2002とJGSS-2006で有意差があったのは40歳以上の者である。職種に関しては上層ホワイトの英語の力が一番高く、下層ホワイト、ブルーカラー、無職、農林漁業従事者となっている。上層ホワイト、農林漁業従事者に関しては若干ではあるが、JGSS-2002の方が英語能力が高いが、その他の職種ではJGSS-2006の方が高い。両データで有意差があるのは下層ホワイト、ブルーカラー、無職であり、特に下層ホワイトの伸びが目立つ。

表4に使用用途ごとの英語能力を示す。JGSS-2002では「友人・知人」とのコミュニケーションに使う者の英語能力が一番高かった。JGSS-2006ではそれについて「インターネットで利用」する者の英語能力が高い。表からも明らかなように、英語を使用している者は、使用していない者よりも英語力が格段に高い。

表4 使用用途別の英語能力

JGSS-2002			JGSS-2006		
	平均値	人数		平均値	人数
仕事で使用	5.64	157	仕事で使用	4.67	299
友人・知人	6.77	75	友人・知人	5.67	158
家族	4.58	31	鑑賞	4.67	570
趣味・旅行	5.56	207	海外旅行	5.19	199
使用しない	3.15	2526	インターネット	5.55	207
			学習	5.20	60
			使用しない	2.80	1178

## 3.3 英語能力の規定要因

英語能力の規定要因を探るために、「英語能力」を従属変数に「年代」（20代を基準に30代から70歳以上のダミー変数を使用）、「学歴」（初等教育を基準に「中等教育ダミー」「高等教育ダミー」を使用）、「女性ダミー」（男性=0/女性=1）、「既婚ダミー」（未婚=0/既婚=1）、「世帯収入のレベル」、「15歳時世帯収入」、「職種」（上層ホワイトを基準に「下層ホワイトダミー」「ブルーカラーダミー」「無職ダミー」「農林漁業従事者ダミー」を使用）、「英語使用の有無」（使用しない=0/使用する=1）を説明変数に重回帰分析をJGSS-2002とJGSS-2006のデータについてそれぞれ行った。

表5 英語能力の重回帰分析

JGSS-2002

	モデル1 $\beta$	モデル2 $\beta$	モデル3 $\beta$	モデル4 $\beta$
30代ダミー	0.006	0.011	0.017	0.01
40代ダミー	-0.024	-0.025	-0.024	-0.025
50代ダミー	-0.047 $\Delta$	-0.044	-0.044	-0.049 *
60代ダミー	-0.086 **	-0.076 **	-0.082 **	-0.091 ***
70歳以上ダミー	-0.157 ***	-0.156 ***	-0.167 ***	-0.157 ***
中等教育ダミー	0.154 ***	0.128 ***	0.123 ***	0.11 ***
高等教育ダミー	0.553 ***	0.509 ***	0.475 ***	0.414 ***
女性ダミー	0.003	-0.003	-0.012	-0.008
既婚ダミー	-0.067 ***	-0.07 ***	-0.074 ***	-0.037 $\Delta$
15歳収入(共変量)		0.027 $\Delta$	0.031 $\Delta$	0.029 *
世帯収入(共変量)		0.122 ***	0.108 ***	0.074 ***
下層ダミー			-0.11 ***	-0.051 *
ブルーダミー			-0.139 ***	-0.078 **
農林ダミー			-0.046 **	-0.015
無職ダミー			-0.107 ***	-0.041
使用有無				0.346 ***
Adj.R-sq	0.325	0.34	0.347	0.454
N	2902	2853	2834	2834

\*\*\* p<.001 \*\* p<.01 \* p<.05  $\Delta$ p<.10

表 5 英語能力の重回帰分析（続き）

JGSS-2006

	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4
	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$
30代ダミー	-0.069 *	-0.057 $\Delta$	-0.066 $\Delta$	-0.05 $\Delta$
40代ダミー	-0.04	-0.03	-0.04	-0.02
50代ダミー	-0.109 **	-0.094 **	-0.105 **	-0.037
60代ダミー	-0.123 ***	-0.101 **	-0.108 **	-0.017
70歳以上ダミー	-0.159 ***	-0.144 ***	-0.157 ***	-0.056 $\Delta$
中等教育ダミー	0.231 ***	0.211 ***	0.202 ***	0.153 ***
高等教育ダミー	0.56 ***	0.506 ***	0.469 ***	0.364 ***
女性ダミー	-0.016	-0.024	-0.036 $\Delta$	0.03 $\Delta$
既婚ダミー	-0.038 $\Delta$	-0.055 *	-0.047 *	-0.023
15歳収入(共変量)		0.055 **	0.055 **	0.05 **
世帯収入(共変量)		0.14 ***	0.129 ***	0.1 ***
下層ダミー			-0.045	-0.034
ブルーダミー			-0.124 ***	-0.097 ***
農林ダミー			-0.06 **	-0.031
無職ダミー			-0.082 *	-0.042
使用有無				0.398 ***
AdjR-sq	0.275	0.297	0.304	0.426
N	2101	2085	2080	2080

\*\*\* p<.001 \*\* p<.01 \* p<.05  $\Delta$ p<.10

表5のモデル1は「学歴」「年代」「女性ダミー」「既婚ダミー」を、モデル2はそれに加えて子どもの頃と現在の経済状態を表す「15歳時世帯収入」「世帯収入のレベル」を、モデル3は職種の影響を見るために、各職種ダミー変数を加え、モデル4はそれに「英語使用の有無」を投入した結果である。モデル4以外は両年とも同じ変数を使用しているため、JGSS-2002とJGSS-2006の比較が可能である。

まず、モデル1を見てみよう。JGSS-2002、JGSS-2006とも若い年代、学歴が高い方が英語能力は高い。学歴をコントロールすると、性別に因る有意差は消滅している。前項で男性の方が英語能力が高いという結果を得たが、これは男性の方が高学歴者が多いことに起因している。結婚をしたかどうかはJGSS-2006では影響力が低くなっている。

モデル2を見てみる。JGSS-2002、JGSS-2006とも、世帯収入は強い影響力を持っており、若干ながらJGSS-2006のほうの $\beta$ 値が高い。「15歳時世帯収入」はJGSS-2002では影響力が弱いJGSS-2006で影響力が強くなっている。

モデル3を見てみる。「職種」をコントロールしても、「年代」「学歴」「結婚の有無（既婚ダミー）」「世帯収入」は両調査とも影響力を持っている。JGSS-2002では、上層ホワイトに対して他の全ての職種の英語能力は有意に低いが、JGSS-2006では「下層ホワイト」に対して有意差はない。これは図14からも明らかなようにJGSS-2006では下層ホワイトの英語能力が高くなっているためである。

「現在の英語使用の有無」を投入したモデル4を見てみよう。「現在の英語使用の有無」を投入してもJGSS-2002では未だ年代の影響、職種の影響が見られたが、JGSS-2006では年代の影響がほとんど見られない。これはJGSS-2006ではJGSS-2002に比べて40歳以上の英語能力が高まったこと、前章で述べたようにJGSS-2006の英語使用者には年代の影響が見られ、若い年代層が英語使用が多く、年代の影響は「使用の有無」に吸収されたためと思われる。つまり若いから英語能力が高いのではなく、若い世代は英語を使う機会が多いので英語能力が高まっていると考えられる。また、「結婚」の影響もあまり見られない。モデル1からモデル3までを見ると、既婚者に比べて未婚者の英語力が高いが、これも、年代の影響と同様に、未婚者が英語を使用する見込みが高いため英語力が高まっていると考えられる。

### 3.4 英語能力の変化

JGSS-2002 と JGSS-2006 の変化をまとめてみる。学歴の影響が JGSS-2006 では少し弱まっている一方、JGSS-2002 では影響力があまりなかった「15 歳時の世帯収入」が JGSS-2006 では影響を及ぼしている。これは、大学への進学率が高まって、大学間格差が広がっていることにも起因しているのではないだろうか。同じ学歴でも、子どもの頃に恵まれた家庭環境にある者が学校以外でも英語を学習する機会を持ち、また大学も偏差値の高い大学に進学して高い英語能力を持つ層と、そうでない層との 2 分化が始まっているのではないだろうか。松繁（2004）は英語力は直接的に所得を上昇させているだけでなく、昇進を通じて間接的にも所得を上昇させていることを指摘している。JGSS の調査においても JGSS-2002、JGSS-2006 とともに世帯収入が英語力に影響を及ぼしていることから英語能力と収入の間には密接な関係があるといえる。同時に世帯収入の影響力が JGSS-2006 のほうが若干高いことから、いわゆるイングリッシュ・ディバイドは進んでいく傾向が窺われる。

一方、下層ホワイト、ブルーカラーの英語能力が高まっており、英会話力・英語読解力とも「全くできない」層が減少している一方、英語力が高い層は殆ど増加していない。このことから英語力が平均化され、一般の人の英語力が底上げされている傾向も窺われる。

現在の使用を加えたモデル 4 では JGSS-2002 に比べて JGSS-2006 では「使用の有無」の影響が大きい。JGSS-2006 では英語能力が JGSS-2002 よりも伸びているが、これはひとつには英語を使用すると回答した者が増えたためだと考えられる。前述したように JGSS-2002 と JGSS-2006 では現在の英語使用の質問の内容が異なっているので、単純に比較はできないが、この数年で英語を使う機会は仕事でも旅行やインターネットでも増えており、この傾向は今後も続くことから、英語を使用することにより英語能力の向上が期待される。

## 4. まとめ

JGSS-2002 では英語を使用する者は、管理職で、高収入な者が多かったが、JGSS-2006 では、未だ役職に就いていない、一般のサラリーマンが、仕事の上でも英語を使う機会が多くなっている。また、実際に英語を使用しているかどうかということが英語能力に大きな影響を与えている。JGSS-2006 では、JGSS-2002 よりも英語能力が高くなっているが、これは、一般の人々が、仕事や趣味などで英語を使う機会が増えているためだと考えられる。今後英語を使う場面が公私とも増えると予想され、いわゆるエリート階級だけでなく、一般の人々もますます英語に接する機会が多くなり、それに従って、全般的な英語能力は向上すると期待される。しかしながら、子どものころの家庭環境で英語能力の差がついていく傾向が見られる。また、イングリッシュ・ディバイドの拡大の兆候が見られ、英語能力が高い者、仕事で英語を使う者とそうでない者の格差が広がる傾向も窺われる。

一方、全般的な英語能力は伸びているが、英語会話力、英語読解力とも能力が高いレベルの者は増加していない。初歩的な会話力や読解力は伸びてはいるが、実際に英語を日常生活や、仕事で英語を運用できる者は増えていない。今後は英語能力の全般的な押し上げとともに、英語で自己発信ができるエリートの養成も必要なのではないだろうか。文部科学省は全児童・生徒・学生の英語力の向上を目指しているが、このグローバル社会において、日本が他の国々と渡り合っていくためには、英語力の底上げだけでなく、英語で自己発信できる高度なレベルを持っている者の養成も急務であると思われる。

### [Acknowledgement]

日本版 General Social Surveys (JGSS) は、大阪商業大学 JGSS 研究センター（文部科学大臣認定日本版総合的社会調査共同研究拠点）が、東京大学社会科学研究所の協力を受けて実施している研究プロジェクトである。東京大学社会科学研究所 SSJ データアーカイブがデータの配布を行っている。

[注]

- (1) 矢野安剛・池田雅之編, 2008, 『英語世界のことばと文化』 成文堂
- (2) <http://www.toEIC.or.jp/>
- (3) <http://www.etc.org/>
- (4) 清水・松原 (2007) が立命館大学の 2003 年卒業生に行ったアンケート調査では、有効回答者 159 名のうち、61% (97 名) が英語との関わりをなんらかの形で持っているとしている。
- (5) 年代は 20 歳代、職種は上層ホワイト、都市サイズは町村を基準とした。学歴は高等 (新制短大・高専・大学・大学院、旧制高校・専門学校・高等師範学校・大学・大学院)、中等 (新制高校、旧制中学・高等女学校・実業学校・師範学校)、義務 (新制中学校、旧制尋常小学校 (国民学校を含む)・(高等小学校) の 3 つに分類して、義務を基準とした。結婚の有無は未婚=0、既婚 (離婚・死別を含む) =1 とし、未婚を基準とした。
- (6) 無職の者で「仕事で使用する」と回答した者もいるが整合性を欠くため無職の者は分析から除外した。
- (7) 本人収入を使用して分析したがデータ数がかなり減少して有意な数値がでなかった。

[参考文献]

- 鹿野繁樹, 2005, *Estimating Causal Effects of English Use on Earnings for Japanese Domestic Workers*, 日本経済学会秋季大会発表原稿.
- 清水裕子・松原豊彦, 2007, 「経済学部卒業生の英語使用に関するニーズ分析」『立命館経済学』第 56 巻 第 3 号.
- 松繁寿和, 2004, 『大学教育効果の実証分析』日本評論社.
- 矢野安剛・池田雅之編, 2008, 『英語世界のことばと文化』成文堂.